随想

夏合宿から　　小原哲彦

長期合宿に期待していたものは　洞窟の本当の姿である。洞窟に入ってみて最初に感じたことは洞窟の無気味さである。下るにしたがって　孤独というものを実際に体で味わった。もし他に人がいなかったら　きっと気が狂ってしまうだろうような感じである。寒さで身がちぢまり，おまけにとじこめられた有様は別のおれがにげだそうとしている。歌をくちずさみ，いろいろな事を考えて気をまぎらしている。死ぬまぎわは，人生のすべてを思いめぐらすとよくいわれるが　全くこれと同じ様なものである。が，合宿そのものは五月連休合宿にくらべ実に充実したものであり，雰囲気がとてもよく，これまでにない合宿である。洞口でアタック隊のかえりを待っている間に，考えさせられるものがわにせまっている。それは，心を動かす何ものもないことに気付いたのである。

我一人テラスにて思う　　井上清

7月25日，僕は確保役のため白蓮洞の洞口から20mほど下の第一テラスにおりた。もうだいぶハシゴになれたようだ，スムースに下れる。さて一畳ぐらいの広さのテラスにおりてこれから最低8時間はこんな所に一人でおるのかと思うと何かいやな気分だ。後からおりてきたアタック隊4人が下に行ってしまうといよいよ一人になってしまった。テラスで一人でいるのは，大変孤独でつらい。体はしんしんと冷えてきて，つま先がいたくなる。冷えた岩にすわるより二本の足で立ってるほうが楽であるみたいだ。自分以外何もなく　ただいろんなことを模索してしまう。家のこと，大学のこと，クラブ，友人，etc.　そして，僕は今なんでこんな所におるのかと考えてしまう。下に仲間の作業をやってるのが聞こえる。上を見るとせまいすきまの空がとても青くて　明るい木の緑が目にしみる。この休みは1/3がクラブであけて　1/6が北アルプス。要するに半分家にいない。家に帰ったらまず勉強の計画をたてよう。僕は何の勉強もしてないから。

僕の青春は何であるか。クラブか？　学校か？　マ（恐？　くそれにしても空が青い）　それとも高校の時の沖縄まで行った西日本中　かけずり回りの旅行か？　ちがうように思うのだ。全体がそれだと思うのだ。今自分が生きているということそのもの全体が青春だと思うのだ。だからクラブとか，旅とか，恋とかいうものはその青春の一部分にすぎないのだと思う。僕は今，19才になって少し　来年は20才，年月がた

フイは、はやいと思うけど、月日は確実にすぎていくのであるから、おそいもはやいも関係ないかもしれない。気が付いたら手帖に十ページほど走り書きしてる。その走り書きの大体がこの作文だ。昼ごろ一回、ハ木さんに呼ばれて上にあがった。

無題　　橋高俊夫

今年の白蓮洞のやり残しによって、最低もう一回は青海へ行くことになりそうである。しかし300m級の穴をやるには充分な日程、人員が必要である。となると次は来年の夏ということになろう。来年白蓮洞をやり終えたとしても、まだ滝谷は調査される余地があり、ハシゴの必要な穴が確認されている。そして来年青海へ行くことになると9年目計10次の調査となる。マイコミ平は、今や我々にとって未知の世界でなく、新鮮な魅力をもったフィールドではなくなった。それに千里洞級の穴を期待することはまずできないだろう。それは青海において記録の挑戦は不可能ということである。我々はそういう洞窟班の現実にいかに対処し、いかに活動していくべきであろうか。そして、当面の目標「白蓮洞」そして青海に対し、新しい魅力を求め、ある意味でマンネリとも思われる現状に新たな意欲を燃やさなければならない。ともすれば、先輩達の輝かしい記録の上にあぐらをかいて無気力になりがちな私達にとって、今こそ原点に帰り、洞窟探検の真の意味を考え直さなければならないのではないだろうか。我々一年は機会あるごとに主体性の欠如といわれてきた。確かに、今までは先輩に言われた事をやるだけで精一杯だった。あとは何をやったらいいかわからなかったし、自分でも洞窟への興味はあまりわかなかった。しかしながら青海にある程度のメドがついた今、新しいフィールド、新しい目標を求めるのは我々の最大の課題であろう。特に我々一年は積極的な活動をしていかなければならない。

エピローグ

探検とは何か。それは、自由への革命である。そして、真に利己心を追求する者にとって、最大のよろこびである。
なぜなら、利己心は常に、もっと生命あるものを、もっと楽しく、もっと豊かなるものを、求めているからだ。
真に探検を欲するものは、何の目標も知らなければ、何の目的も持たない。生きることと自分自身であることに満足を見出すような、真剣に、利己心を追求する者でなければならない。